

令和4年度 佐世保市保幼小連携アンケート調査に関する報告書

門田 理世(西南学院大学大学院)

諫山 裕美子(久留米大学) 沖本 悠生(九州産業大学)

佐世保市幼児教育センター

本アンケートの主な結果概要 及び 提案

- 佐世保市の全施設(園・学校)で92.1%の回答があり、回答数は例年の約2倍、487人が回答した。【p2】
- 各施設に、複数人での回答を依頼した結果、接続期の担当者以外の回答が増え幅広い意見を得られた。【p2】
- 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」を活用した回答者は、自身の必要に応じて、手引書のようにガイドラインを使用している実態がみえた。【p4】
- 保幼小連携の在り方については統一の見解があるわけではなく、先生方が捉える課題は多岐にわたる。【p4】
- 保幼小の教職員間の連携は保幼小連携の担当の有無は関係なく、乳幼児も小も必要度を高く感じており、その連携には各施設1人ではなく、複数の担当者で関わるべきだと捉えられている。【p5】

<本報告書における提案> 保幼小連携として教職員間の交流の場を設ける必要性への先生方の意識の高さが示された。各々の課題は異なるため、地域ごとに課題を共有し、連携を図ることが今後期待される。

※乳幼児教育・保育施設を「乳幼児」、小学校を「小」と表記する。

1. はじめに

本事業は、平成28年から調査を開始し、平成30年に締結された佐世保市と西南学院大学の包括的連携協定を基盤として毎年続けてきているものである。これまでの研究調査において、佐世保市において保幼小連携をより推進させていくことが課題であることが明示されてきた。そこで今年度は、各園・各学校においてアンケート回答者を複数人依頼することで、より間口を広げた実態把握と課題の抽出を試みた。保育所、認定こども園、幼稚園(乳幼児教育・保育施設)と小学校とをつなぐ保幼小連携への意識や接続カリキュラムの作成について、また要録に関する項目などの調査・分析結果を以下に報告する。

2. アンケート調査の概要

【調査対象】佐世保市内の全ての乳幼児教育・保育施設、小学校 【調査時期】令和4年6月

【アンケート対象者】※各園・各学校において複数の職員の皆様に回答を依頼

乳幼児:園長・副園長・主任・クラス担任・保幼小連携担当者等

小:校長・教頭・教務主任・主幹教諭・指導教諭・担任・養護教諭・特別支援学級担任・保幼小連携担当者等

【アンケート調査項目】

アンケート調査項目については、「保幼小連携」・「要録」の2つの大きな軸を中心に、設定した(表1)。

【アンケート回答数】

これまでの調査から「保幼小連携は、園・学校全体で共通理解し、取り組む必要がある」と示唆されたことから、今年度は状況確認のため、各園・各学校において複数の職員にアンケート回答を依頼した。アンケートの回収率は昨年度より下がっているが、全体で92.1%と非常に高い回収率であった(表2)。例年通りの高い回収率から、佐世保市の先生方の保幼小連携事業への高い関心と協力姿勢が示された。

表1 アンケート調査項目

I 回答者の属性
II 保幼小連携について
(1) 連携の段階
(2) 保幼小連携を推進する意識の度合い
(3) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の既読
(4) 園・学校独自の「接続カリキュラム」の作成段階
(5) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の活用
(6) 園・学校独自の接続カリキュラムガイドラインの具体的な協議内容
(7) 保幼小連携を推進するための職員間の交流
III 要録様式(佐世保版)改訂版について
(1) 乳幼児要録の記入・確認の有無/要録作成上の課題
(2) 小今年度の要録の既読の有無/要録の今後の活用の可能性
IV 保幼小連携や要録に関しての要望や意見
V これまでの調査や報告書の認知について

また、依頼に応じて各園・各学校で複数の回答があり、特に、**小**の回答率は昨年の3.4倍、1校あたり5.7人の回答であった。総回答者数が487名で、昨年度の回答数(244名)と比較すると約2倍となった。

表2 アンケート施設別回答数

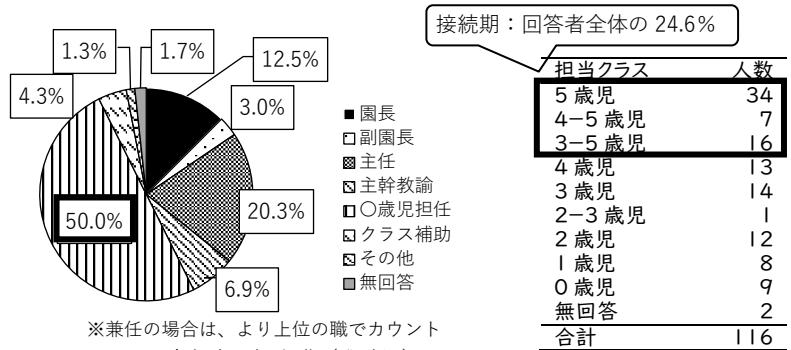
	送付 回答		施設回収率		個人回答数	
	施設数	施設数	R3年度	今年度	R3年度	今年度
乳幼児教育・保育施設	104	94	94.2%	90.4%	170	232
内 保育所	56	50	96.4%	89.3%	90	132
訳 認定こども園	40	38	100%	95.0%	72	89
幼稚園	8	6	71.4%	75.0%	8	11
小学校	47	45	100%	95.7%	74	255
総数	151	149	97.3%	92.1%	244	487

3. 結果

I アンケート回答者の属性

(1) 接続期の担任は昨年度より減少

回答者のうち、**乳幼児**では50.0%、**小**では51.4%と、約5割がクラス担任であった(図1・2)。クラス担任の割合を見たところ、**乳幼児**の5歳児担任は全体の24.6%、**小**の1年生担任は26.3%であり、どちらの施設の回答者も、接続期(年長・小1)の担任の割合は例年に比べると少なかった(表3・4)。よって、本アンケートの内容は、接続期担当以外の先生方の意見も反映されている結果である。



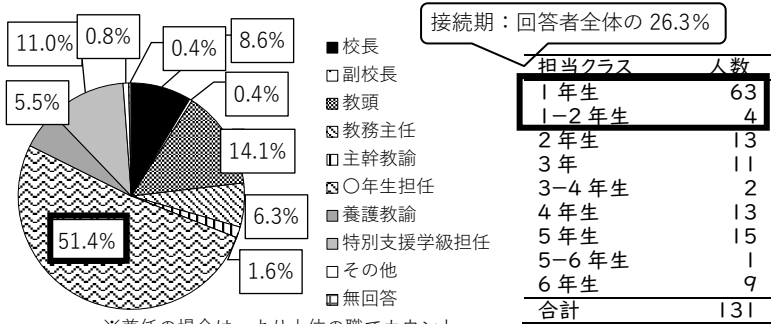
※兼任の場合は、より上位の職でカウント

図1 今年度の担当職(乳幼児)

表3 担当クラス内訳(乳幼児)

(2) 保幼小連携担当者は2~3割

乳幼児は、連携担当者は28.4%、それ以外の回答者は71.6%、また、担当になったことがない、未経験者は30.2%と3割であった。**小**は、連携担当者は23.1%、連携担当者ではない回答者が75.3%であった。どちらの施設も、アンケート全体の回答者の割合の中で、保幼小連携担当者は2~3割であった(図3)。



※兼任の場合は、より上位の職でカウント

図2 今年度の担当職(小)

表4 担当クラス内訳(小)

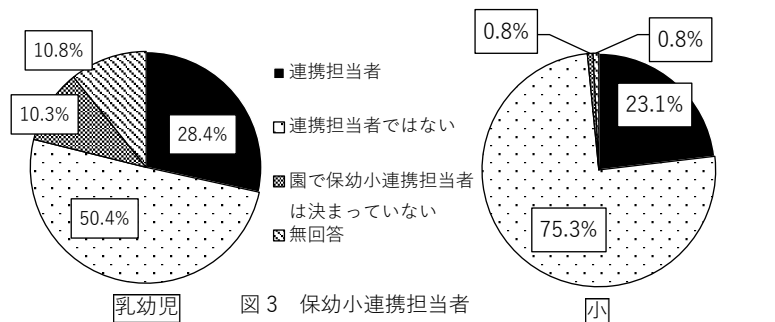


図3 保幼小連携担当者

II 保幼小連携について

(1) 最も多いのは第2段階(交流段階)：近隣の乳幼児教育・保育施設、小学校との連携の段階

乳幼児と**小**に現在の連携の段階を尋ねたところ、両者とも「保幼小連携の推進、連絡体制の確立、保育・授業参観、行事への招待」の第2段階(交流段階)が約半数と最も多いことがわかった(図4・5)。

<保幼小連携の段階>	
第1段階(はじめの一步段階)	保幼小連携の啓発、近隣の施設・小学校の確認、研修会参加
第2段階(交流段階)	保幼小連携の推進、連絡体制の確立、保育・授業参観、行事への招待
第3段階(互恵性を求めた連携段階/接続カリキュラム試行段階)	保幼小連携の充実、互恵性のある連携活動、接続カリキュラム検討委員会の設置
第4段階(接続カリキュラム実施段階)	保幼小連携の発展(評価・改善)、接続カリキュラムの作成・実施

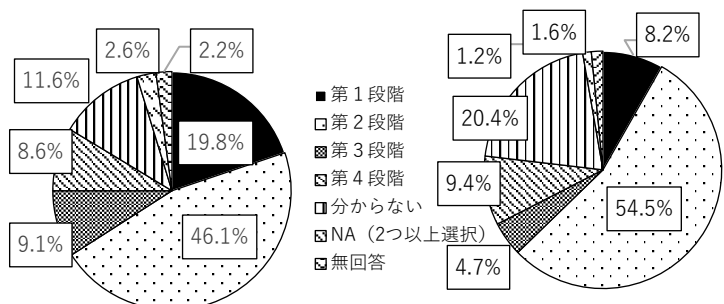


図4 小との連携の段階(乳幼児)

図5 乳幼児との連携の段階(小)

(2) 保幼小連携の意識が高い回答者は6割

「保幼小連携の意識の度合い」を4段階で尋ねたところ、**乳幼児**では62.9%、**小**では64.7%で、どちらの施設も「高い」「やや高い」を合わせて6割強であった(図6)。

回答者のうち、保幼小連携担当と担当外の意識の度合いを比較すると、保幼小連携担当者で意識が「低い」と答えた方はどちらもおらず、「やや低い」が1~2割であった(図7)。保幼小連携担当者は、責任感をもち、保幼小連携への意識が高いといえる。

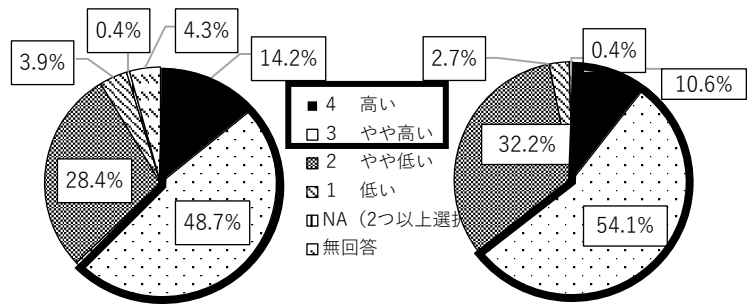


図6 保幼小連携への意識の度合い

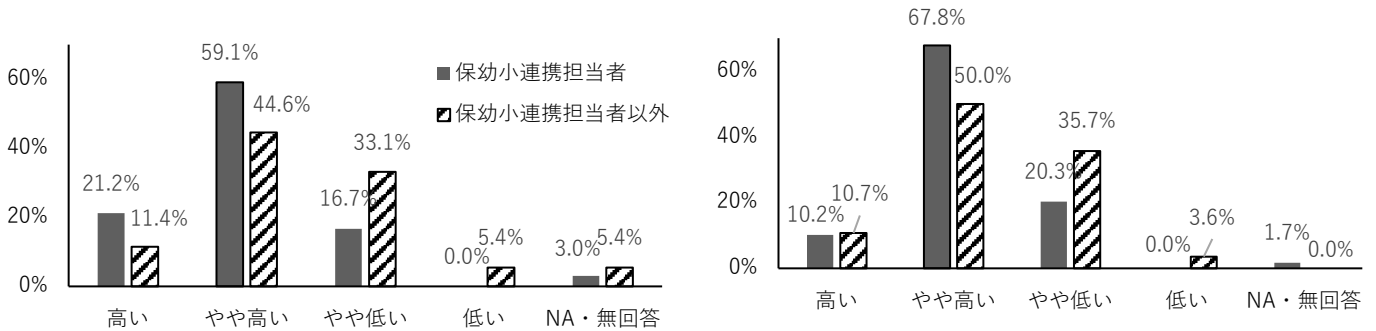


図7 保幼小連携担当者・担当者以外の意識の度合い

(3) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」は**乳幼児**の読んでいる割合が高い

令和3年3月に各園・各学校に保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」が配布され、約1年が経った。配布されたガイドラインに目を通したかどうかを尋ねたところ、「全て読んだ」または「一部読んだ」と答えた回答者は、**乳幼児**では81.5%、**小**では53.3%であった(図8)。回答者の中に保幼小連携担当者や接続期担当が少ない中で、接続カリキュラムガイドラインの既読率は高いことが示された。

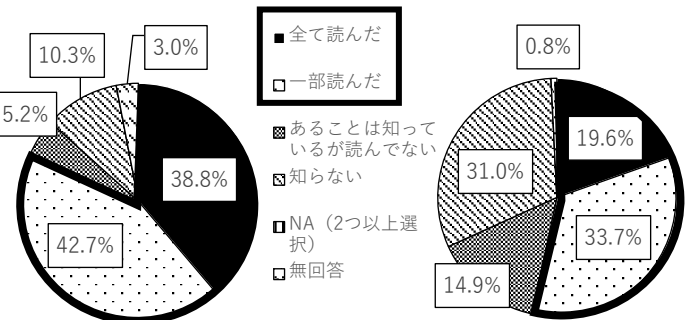


図8 ガイドラインの既読の有無

(4) 5割弱が園・学校独自の「接続カリキュラム」を作成中

ガイドラインを基に各園や各学校の実態に合わせて作成する「接続カリキュラム」の作成段階を尋ねたところ、双方ともに5割弱が作成の段階であった(表5)。

併せて、現在の具体的な作成状況や学校の課題、それに対するご自身の意識について尋ねたところ、接続カリキュラムについて[園全体・学校全体での共通理解の必要性]、[接続カリキュラム作成に向けた話し合いの時間不足]、[接続カリキュラム作成・内容のための理解不足]、[具体的な作成方法の検討]等の課題が挙げられた。

なお、本調査は6月時点のものである。その後、令和5年1月の担当者会の開催時、接続カリキュラムを作成し持参した施設は、**乳幼児**62.5%、**小**76.6%で、全体で65.2%が作成済であった。

令和4年度の担当者会でカリキュラムを持参することを周知していたことを踏まえると、作成率は高いとはいえない。作成率が上がっていない要因と対策は今後の検討課題である。

表5 園・学校独自の「接続カリキュラム」の作成段階

作成の段階	乳幼児	小
①既に完成して活用	41 (17.7%)	55 (21.6%)
②作成済、活用まだ	50 (21.6%)	30 (11.8%)
③現在、作成中	18 (7.8%)	32 (12.5%)
④共通理解済、作成まだ	39 (16.8%)	6 (2.4%)
⑤共通理解まだ	22 (9.5%)	23 (9.0%)
⑥作成予定なし	10 (4.3%)	3 (1.2%)
⑦よくわからない	41 (17.7%)	101 (39.6%)
⑧その他	6 (2.6%)	0 (0.0%)
NA (2つ以上選択)	1 (0.4%)	1 (0.4%)
無回答	4 (1.7%)	4 (1.6%)

(5) 保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の活用：どの部分を活用しているのか？

① 最も多く活用した部分は第3章

ガイドラインの目次は右記のように3つの章から成っており、**乳幼児**、**小**ともに『「接続カリキュラム（佐世保版様式）」の作成について』の箇所の活用が最も多いことが分かった。また、「全体を通して活用した（活用したい）」と数名の回答もみられた。回答者の内訳は**小**は校長・教頭・1年生担任が多く、**乳幼児**は全ての担当職の方が活用している実態が明らかとなった。

② 接続カリキュラムガイドラインの多様な活用

自由記述の回答から、それぞれの章での具体的な活用方法が明らかとなった。

第1章「佐世保市における保幼小連携について」では、特に「育みたい資質・能力（3つの柱）」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」の箇所を、自園・自校の子どもの姿への活用、子どもの育ちのヒントや手がかり、具体的な取り組みの理解、週案や接続カリキュラムへの活用に使用していた。

第2章にあたる「佐世保市における「保幼小連携接続カリキュラム」～子どもの姿～」の箇所では、特に「アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム」について、2つのカリキュラムの関係やつながりを意識したり、佐世保市が目指す子どもの姿の3つの視点「生活する姿」「かかわる姿」「学びに向かう姿」のねらいと園の活動やねらいを当てはめたり、カテゴリに分けたりなどの活用方法が見られた。

第3章にあたる『「接続カリキュラム（佐世保版様式）」の作成について』では、記入例・モデル案を参考に、各園・各学校の実態を基に、活動・項目への当てはめや置き換え、各園・各学校独自のものと組み合わせや照らし合わせ、活動の振り返り、ポイントの把握、書き方への参考、話し合いへの活用、幼・小の相互理解の資料として活用など、多岐にわたって活用されていることが分かった。

保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」目次	
第1章 佐世保市における保幼小連携について	
1.	保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」作成について
2.	育ちと学びをつなぐ保幼小連携
3.	幼児教育と小学校以降の教育の特色
4.	接続期に保育者・教員の双方が意識したい配慮事項
5.	「育みたい資質・能力（3つの柱）」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」
6.	佐世保市における接続期の考え方
7.	佐世保市が目指す保幼小連携
第2章 佐世保市における「保幼小連携接続カリキュラム」～子どもの姿～	
1.	「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」
2.	子どもの育ちと学びをつなぐ（子どもの育ちをとらえよう）
3.	「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」のつながり
第3章 「接続カリキュラム（佐世保版様式）」の作成について	
1.	「接続カリキュラム（佐世保版様式）」の作成にあたって
2.	「接続カリキュラム（佐世保版様式）」の作成の仕方
3.	「接続カリキュラム（佐世保版様式）」～乳幼児教育・保育施設の記入例～
4.	「接続カリキュラム（佐世保版様式）」～小学校の記入例～
5.	「接続カリキュラム（佐世保版様式）」（モデル案）

表6 担当者会で話し合いたい内容

焦点コード	[オープンコード]	乳	小
接続期の理解・取組	保幼小接続の繋がりに関する共通理解	11	10
	スムーズな移行のための取組	10	5
	双方の考え方の共通理解	3	6
	子どもの姿の共有	5	
	入学後の子どもの姿の確認	3	
	子どもの不安な気持ちの共有	2	
	双方の子ども観の共通理解		2
	双方の指導観の共通理解	1	2
	双方の保育・教育の理解	1	
	双方の職員の交流		1
接続カリキュラムと実践内容	他の園・学校・地区の実践内容、情報の共有	15	5
	接続カリキュラムの具体的な活用、活動内容や成果	12	14
	接続カリキュラムの見直し・検討	7	8
	接続カリキュラム作成について		1
幼児期の保育・教育	園で身につけるべき子どもの姿	17	
	園で取り入れるべき活動内容	8	
	園の保育・実態の理解	5	4
	園のカリキュラム内容の理解		4
交流活動	園で就学前に育ってほしい子どもの姿	3	
	小学校側が必要な配慮を知る		3
	交流の内容・在り方	4	17
	交流の内容・在り方（コロナ禍）	3	8
小学校の教育	小学校の学習内容・活動の理解	4	6
	小学校の依頼事項を伝える		3
	小学校側の指導について		1
	小学校の校内体制について		1
入学する子どもの情報	子どもの情報共有	3	6
	情報交換会の在り方・成果	2	
	保護者連携について		2
コロナ禍の教育	保護者の不安感		1
	コロナ禍における教育の在り方	4	
	幼児期の教育についての検討	2	
幼児教育の検討	人と関わる力についての協議	1	
	架け橋プログラムに基づいた実践	1	
	地域の特色に関する確認	1	
その他	小学校側の協議の要望を知りたい	1	
	接続カリキュラムガイドラインの改善		1
特になし	わからない・担当ではないから特になし	7	2
計		136	113

(6) 1月の担当者会で話し合いたい内容（課題やテーマ）は多岐にわたる

毎年行われている担当者会では、各学校・各園の実態の情報交換が行われてきた。そこで、その担当者会についての意識を尋ねた。自由記述の回答で**乳幼児**123、**小**109名が記述した回答を、意味内容ごとに分け（**乳幼児**136、**小**113）分析した（表6）。

乳幼児、**小**ともに関心が高かったのが、[保幼小接続の繋がりに関する共通理解][スムーズな移行のための取組]などの、接続期にどのように移行をつなげるか、接続期をどう捉えるべきかという意識である。また、接続カリキュラムの実践や検討に関する意見として、双方の教育

の理解、実践内容や情報、具体的な活用例を知りたいなどの意見が挙げられた。

乳幼児は「園で身につけるべき子どもの姿」[他の園・学校・地区の実践内容、情報の共有]と、自園の保育に対する取り組みに手がかりを求めていることがわかる。小は「交流の内容・在り方」と、コロナ禍で減少してしまっている交流活動をいかに再開していくかの意識がみられた。

表6をみてわかるように、これだけ協議したい内容が多岐にわたることから、年に2回の担当者会では十分に連携がとれるとは言い難く、年に数回の協議の場を設ける工夫が必要だともいえる。

(7) 保幼小の職員間の交流に対する前向きな意識と、複数の職員で関わることの必要性

昨年度のアンケート調査において、保幼小連携に関する課題の回答で最も多かったのが「園と小学校の職員間の共通理解・交流」であった。そのことから、各小学校区にて「保幼小連携を深めるための職員間の交流」を実施することについての意識を尋ねた。

① 実施の是非

上記のような交流を「ぜひ実施したい」、「時間が合えば実施したい」という意見が乳幼児90.5%、小85.1%であり、またその意識の高さは保幼小連携担当の有無に関わらず、示された。ここから、教職員間が連携することについての必要性は佐世保市全体の先生方がかなり高い意識を有しているといえる(図9)。

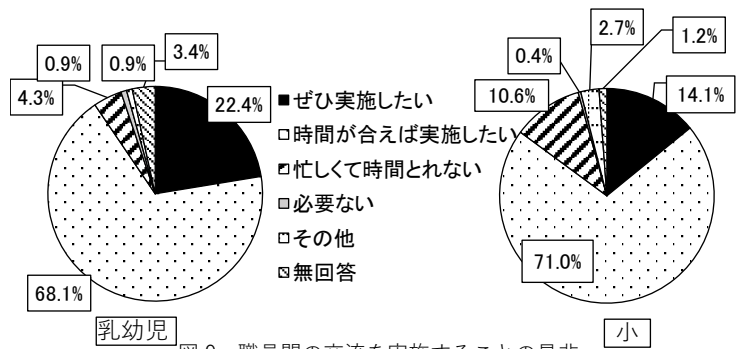


図9 職員間の交流を実施することの是非

② 交流時の参加者(複数回答)

交流をする場合、誰が参加するべきかについて、担当職の選択肢を設けて設けたところ、接続期担任の選択が最も多かった(表7)。しかしそれだけでなく、複数の参加者を選択した回答が乳幼児は66.4%、小は72.1%となり、担当職だけではなく学校・園全体で関わるべき課題としてとらえられていることが明らかとなった(表8)。

表7 交流時の参加者

参加者	乳幼児	小
接続期(年長、1年生)担任	177 (76.3%)	171 (67.1%)
保幼小連携担当者	139 (59.9%)	152 (59.6%)
管理職	55 (23.7%)	75 (29.4%)
参加できる職員全員	34 (14.7%)	65 (25.5%)
その他	5 (2.2%)	8 (3.1%)
無回答	5 (2.2%)	3 (1.2%)

表8 複数回答の割合

選択した担当職	乳幼児 (%)	小 (%)
「参加できる職員全員」	14.7%	25.5%
担当職の3つ以上を選択	12.5%	18.4%
担当職の2つ以上を選択	39.2%	28.2%
複数の参加者を希望	66.4%	72.1%

学校・園全体、複数人で関わる意識

③ 実施の回数と時期

交流を実施する場合の希望の回数と時期を尋ねた(表9)。実施回数は乳幼児の最も多かったのが1回で、小が2回であった。また、実施の時期に関しては、年度初め、5~6月、夏休み、2学期(9~12月)、3学期(1~3月)とそれぞれ10~20%で回答が分散した。実施をする際には、各小学校区の実態に合わせてすり合わせを行う必要がある。

表9 交流の実施回数

希望回数	乳幼児 (%)	小 (%)
1回	58 (25.0%)	71 (27.8%)
1~2回	10 (4.3%)	3 (1.2%)
2回	29 (12.5%)	91 (35.7%)
2~3回	8 (3.4%)	5 (2.0%)
3回	29 (12.5%)	22 (8.6%)
3~4回	2 (0.9%)	2 (0.8%)
4回以上	9 (3.9%)	0
その他	4 (1.7%)	0
回答数	149 64.20%	194 76.10%

④ これまでの取組で良かった実践例

交流を実施するにあたって、参考となる実践事例を共有したいと考え尋ねたところ、多くの事例があがった。主なカテゴリを図 10 に示す。<子どもの情報交換>では、入学前の情報共有の大事さに加え、入学後に様子を知ることができると、保育に活かすことができるという意見もあった。また、小学校や園にそれぞれ参観をする、学校開放日の日に行くなど行事を活用したり、園内・校内の研修へ参加を呼び掛けたりなど、特別な機会を設けるのではなく、それぞれの行事やイベント・研修等の機会に声かけをして交流できている事例も多くあった。この取組は、無理なく始められる1歩になり得る。参加した先生方からは一様に「良かった」という声があることから、地域ごとにその機会を探してみることから始めることを提案する。

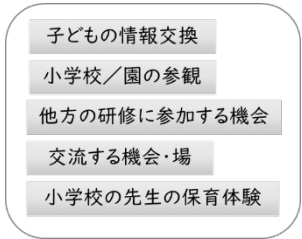


図 10 交流事例のカテゴリ

Ⅲ 要録様式(佐世保版)改訂版について

(1) 乳幼児要録作成に関する課題は依然としてあり、継続的な研修が必要

要録作成に関する課題を尋ねた(表 10)。アンケート回答者の中で、「昨年度、年長児の要録を記入・確認した」人は、134 人と全体の 57.8%であったため、記入に携わっていない回答者には、記入者に尋ねていただくよう依頼をした。そこで書かれた 101 名の回答を分析した。表 8 は、3 以上の事例が入ったコードである。<簡潔な記述の仕方や内容の選択><要録のための記述の難しさ>に加え、<各項目の書き方について><要録作成に関する研修機会の必要性>等から、要録の書き方について周知徹底や研修は続けていく必要があるといえる。これまでの調査結果を受け、今年度、幼児教育センターでは要録記入に関する研修機会を設けた。そのことが来年度の意識調査で課題解決に向かっているか、再度確認したい。

表 10 要録作成の課題(乳幼児)

簡潔な記述の仕方や内容の選択	36
要録のための記述の難しさ	12
小学校側の活用について	12
小学校側の要望に応じた記述	9
作成時間の確保	7
各項目の書き方について	6
配慮を要する子どもの記述	4
要録作成に関する研修機会の必要性	3

(2) 小1年生担任・管理職は要録を8割以上が読んでいる

小学校側の要録の既読率(表 11)をみると、「全員分読んだ・簡単に全体を把握」は1年生担任 82.0%、管理職 86.4%と全体の8割を超え、「読まない」といった回答はなかった。一方で、今年度は他学年の教員にもアンケート回答を求めたことから、1年生の要録を他学年の教員が読むことがほとんどないことも明らかとなった。

表 11 1年生の要録の既読率(小学校)

	1年生担任	管理職	その他の学年担任	その他の担当	計
全員分読んだ	42	24	1	7	74
簡単に全体を把握	15	27	1	10	53
数人分読んだ	3	3	4	14	24
これから読む	7	3	8	6	24
読むことはほとんどない	0	0	48	26	74
無回答	0	2	2	2	6

Ⅳ 保幼小連携・要録に関する意見や要望

アンケートの最後に、保幼小連携や要録に関する意見や要望をそれぞれ尋ねたところ、乳幼児 47、小 31 の記述があった。それぞれ、主に以下のような回答がある(回答は[コード化]した。()内は回答者の所属と回答数)。

- ・『要録』…[要録は、とても参考になる(小 8)] [小学校の活用を知りたい(乳幼児 6)]
[段階評価が良い(乳幼児 4、小 1)]
- ・『情報共有』…[配慮を要する子どもの共有が不十分(小 4)] [引継ぎ時期を早くしたい(小 3)]
- ・『交流活動』…[交流再開への希望(乳幼児 4、小 2)] [年長組の小学校訪問の効果(乳幼児 3)]
- ・『保幼小連携』『職員連携』…[職員同士の交流機会の確保(乳幼児 4)]
[時間の確保が難しい(乳幼児 1、小 3)]

それぞれ少数意見ではあるが、記述された内容を幼児教育センターとともに確認をし、今後の保幼小連携や要録様式の検討につなげていきたい。また、要録は段階評価で記入する希望が毎年少数意見で挙がってくるが、乳幼児教育は方向目標を立てて、その育ちの過程そのものを評価していくことが重要であることを改めて確認したい。乳幼児の中には、子どもの情報についても口頭での引継ぎをしているために要録記入が不要ではないかという意見もみられた。しかし、要録作成や小学校への送付は幼稚園、認定こども園では法律で定められており、保育所でも保育所保育指針で規定されていることを園内でも共有する必要がある。

V これまでの調査や報告書の認知について

冒頭に述べたように、この調査研究は長期間続けており、毎年佐世保市幼児教育センターのHPでも公開している。その情報がどれくらい受け取られているかを今年度は新たに調査をした。

アンケートの回答経験は過去数回以上の回答者は乳幼児45.6%、小25.9%である一方で、今年初めて回答した人が乳幼児39.2%、小58.0%であった。

また、昨年度の「令和3年度佐世保市保幼小連携アンケート調査に関する報告書」を読まれたかを確認したところ、読まれていない方が大半であることが分かった(図11)。この調査研究は、佐世保市の保幼小連携について実態を把握するとともに先生方への啓蒙の一助となり得るものだと捉えている。まず、調査結果に目を通し、保幼小連携のことを考える時間を作られることを期待する。

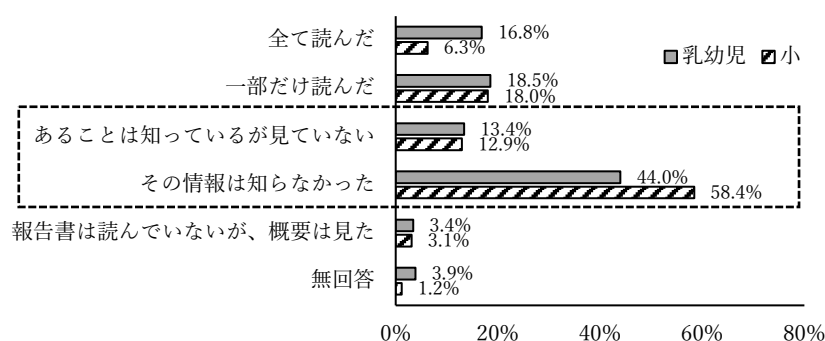


図11 昨年度の調査報告書を読んだか

4. まとめと今後の課題

本アンケートで明らかとなった保幼小連携「接続カリキュラムガイドイン」の具体的な活用法から、このガイドラインが、接続カリキュラムを作成していく過程で「指針の役割」を果たしていると示唆された。今後も、このガイドラインを活用しながら各園・各学校独自の接続カリキュラムの作成が進むことが期待される。

今年度は、これまで続けてきた調査の結果を受けて、新たに接続期担任以外の先生方の意見も調査を行った。質問によっては、「担当外だからわからない」といった回答も散見され、保幼小連携は担当職員がするものとして捉えられている状況も明らかとなった。一方で、令和3年3月に各園・各学校に配布された保幼小連携「接続カリキュラムガイドライン」の既読率が、保幼小連携担当者や接続期担任が少ない中でも高かったという結果や、その他の分析結果から、保幼小連携を園内・校内全体で共有することの大切さや、積極的に地域の園・学校との連携を望んでいる先生方の意識の高さもみられた。佐世保市では、毎年定例会として保幼小連携の担当者会や公開保育・授業等の研修が継続されてきている実績がある。この先、その内容をより実践に即した形で充実させていくことに加え、可能な機会を見つけて、地域で職員の交流する機会を設けていくことが、子ども達の円滑な保幼小連携につながるといえる。

先進的に取り組まれている事例や接続カリキュラムを今後さらに後押しし、各園・各学校・各地域で創意工夫していく仕組みづくりが求められている。また、本調査がその意識付けの一環となることを所望する。

以上